



冬来たりなば、春遠からじ。

隔月発刊の本誌はいつも、季節の移ろいの中に製作します。今号では、発刊日が近づくにつれ、目に見えて町が色づいていきました。

振り返ると2月、「マイ・ストーリーを語る生徒を育む進路指導」の取材のために訪問した北海道旭川水鏡高校に広がっていたのは、一面の銀世界と鈍色の空でした。その校庭の雪上に描かれた、どこまでも続く一筋の道。隊列を組んで汗を流すジャージ姿が、ひととき鮮やかに見えました。

冊子がお手元に届く頃、先生方の通勤路は、年度の始めにふさわしい春色にあふれているのかもしれませんが。実は、あの道を通って、季節はやってきたのです。自らを温め、明日に向かって走る生徒が雪を溶かし、温もりや色彩を連れてきてくれたのです。(河野)



VIEWnext  
電子ブック 高校版は

電子ブックで閲覧できます

『VIEW next』高校版、『VIEW21』高校版2020年4月号以降の記事は、電子ブックでご覧いただけます。ウェブサイト「VIEW next ONLINE」でご確認ください。

HOME → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー

<https://view-next.benesse.jp/>

VIEWnext

高校版 2022年6月号

6月20日発刊

(予定)

『VIEW next』高校版は  
年6回の発刊です

先生方からのご意見を  
紹介します

## Reader's VIEW

2022年2月号へのご意見

### ICT活用のポイントは「コミュニケーション」

2月号の特集『「1人1台端末」最前線』の実践事例で、愛知県・私立杜若高校がICTの活用のポイントを「コミュニケーション」と捉えて、授業の質的な転換を実現したところに共感した。個人的には、「ここでICTを使えば面白い授業ができる」と感じる場面が時々ある。今まで授業でやりたかったができなかったことのいくつか、ICTの活用で可能になると感じさせることが、ICT活用の第一歩だと感じている。例えば、プレゼンテーションソフトを活用して板書の時間を減らし、PDFの配信によってプリント配布の手間を省くことでできた時間を生徒の活動にあてるだけでも、ICTを使う価値があると思う。まずは使ってみることが大切だろう。ICTが得意な教師に任せるのではなく、授業経験の豊富な教師とICTスキルのある教師がチームを組めば、新たな発想が生まれるのではないだろうか。

千葉県立銚子商業高校 田中三郎

### 生徒の課題が膨らんでいくことこそが大切

「総合的な探究の時間」などでは、生徒が課題を設定した後、その探究に向けて、情報の収集・整理・分析などを行い、1年間の活動を総括するといった流れになっている。その流れには、予定調和的にまとめたいといった学校の論理があるような気がしている。確かに、学期や学年といった区切りがある中で、仕方のない部分もあるかもしれない。ただ、2月号の「未来を描く！ 創る！ イノベティブな生徒たち」で紹介された東京都立南多摩中等教育学校の生徒たちは、活動を続ける中で「課題も見えてきた」と語っていた。課題がどんどん膨らんでいくのが、ある意味あたり前であり、そうした広がりを持たせていくことを大切にしたいと、改めて考えた。

岩手県立花巻北高校 川村俊彦

### 生徒への組織的なメンタルヘルスケアに感銘

コロナ禍の影響で、生徒がストレスや不安から心身の様々な不具合を感じている割合が高くなっている。2月号の「輝く学年団を訪ねて」の沖縄県立開邦高校の記事を読み、生徒へのメンタルヘルスケアが組織的に行われていることに感銘を受けた。生徒へのアンケートを基にどのように面談担当者をつけ、スクールカウンセラーをどのように活用しているのか。学校を訪問して、話を聞いてみたい。

大阪府立八尾高校 中村泰造

### 英語の授業におけるバリエーションの有効性を再認識

1時間の授業の中に、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」のすべてを入れ込むことに意識が向いてしまっただけだと感じている。バリエーションに富んだ授業をすることで、生徒が飽きないように授業をすることは可能かもしれないが、それで必ずしも力がつくとは限らない。しかし、英語の授業では、1つの英単語を様々な方法で活用した方が、より記憶に残り、その英単語を活用できるようになるため、バリエーションを豊かにすることが他教科よりはるかに有効だと思っている。そのことを、2月号の「主体的・対話的で深い学び 授業実践」の東京都立福生高校の記事を読んで再認識した。

福岡県・私立大牟田高校 荒木信一